

関西の土質よもやま話

賢島の決闘

しば 柴 田

とおる 徹 (京都大学防災研究所)

昭和30年代に入り、「全応力 vs 有効応力」議論の口火が切られた。三笠・赤井論争といわれるもので、果たして軍配はいずれにあがるかと、見守る野次馬も少なくなかった筈である。

さて昭和51年2月、両者の対決は学会の場を離れて、ゴルフ場まで持込まれることになる。宮本武蔵と佐々木小次郎が厳流島で決闘した故事にならい、場所は賢島(三重県)が選ばれた。

写真は、戦い済んで日が暮れる前の儀式のひとつまでである。右端に立つ人(赤井教授)と中央に横たわる人(三笠教授)のいずれに軍配が挙げたのか? 三笠先生の様は「斬られて死体引取り人達に抱かれている」とも見えるし、「勝利の胴上げ」のようにも見える。一枚のスナップから、まるで反対の解釈ができるところが面白い。



関西の土質よもやま話

埋田(梅田)を掘る苦しみ

かた 片 瀬

たか 貴 文 (中央復建コンサルタンツ㈱)
土質工学会関西支部長

何の因果か、京都、大阪、三ノ宮。大勢の人が集まる3駅の地下を、同時に掘る運命になった。昭和53年から56年にかけて、国鉄大阪工事局長時代のことである。

中でも心配の種は、大阪ターミナルビルであった。地盤は軟弱な沖積層が厚く、さらに地下水汲上げ規制後上昇した、天満礫層の被圧地下水があり、この辺りの地下工事は、文字どおり人と土、そして水との闘いの歴史である。最近では再開発第2号棟ビルでの国道陥没。古くは地下鉄梅田駅工事での大崩壊等々。トラブルは枚挙にいとまがない。

「突然不気味な地響きが起こった瞬間、立ちすくんだ人々の魂を奪う大音響とともに暗黒の淵に土壌は轟然と陥没し、一帯は阿鼻叫喚の巷と化した。大阪駅東口の駅舎は約40度傾き、倒壊は時間の問題となった。」(岩村 潔: 大阪地下鉄の歩み)

その上鉄道高架橋の根入れは、数mしかない。危険な工事環境を考慮して、当初の計画では地下2階だった。それ

をユーザーの要請で、若い技師連中の強い反対を押し切り、地下4階に踏み切ってしまった。

「ニーズがある限り技術者はその要請に応えるべきだ」との考えがあったからだが……。

勿論、決断の背景には理由があった。第一に連続地中壁の施工技術への信頼。第二に工事中の計測技術に対する信頼。いずれも近年進歩が著しい分野だ。

しかし、いよいよ工事が始まってから、後悔がなかったといえは嘘になる。

「人事を尽して天命を待つ」だが、日夜神に祈る気持。平素ご無沙汰の氏神に日参する。夜の飲み歩きも気が向かず精進潔斎。

工事は無事完成。今は、工事の苦しみを知らない、楽しそうな買物客であふれている。昔の心配が嘘のようだ。縁の下の方持ちであることは所詮技術者の宿命らしい。